里村 亜呼
SATOMURA Ako

造形活動における保護者と子どものかかわりの実態とかかわりを促進する支援ツールの開発

Understanding and Enhancing Parent-Child Interaction in Art Activities through the Development of Support Tools

芸術支援領域

序　章

子どもの造形活動に関する研究は、一般的に学校や美術館などの場を対象にしたものが多く、これまで家庭における造形活動にはあまり焦点が当てられてこなかった。また、筆者が卒業研究で実施したアンケート調査では、子どもの造形活動に関する知識は保護者にとって身近なものではなく、その存在を知らない保護者も少なくないことが明らかになった。最も身近な立場で子どもの造形活動を支えることのできる保護者に対して、これらの知識が十分に行き届いていないことは、造形活動をとりまく環境における課題であると考えられる。

先行研究では、保護者は家庭内における造形環境を構築する中心的存在であり、保護者の造形活動への関心が、子どもが造形的経験に触れる機会に影響を与えると指摘されている。子どもが造形活動に親しめる環境を整えるには、保護者への情報提供や、親子で造形活動に取り組む機会を増やすことが重要である。しかし、現状では保護者向けの情報提供が十分であるとは言えず、保護者を対象とした支援の充実が求められる。また、具体的な支援の方法を検討するために、保護者が造形活動中の子どもにどのようにかかわっているか、参与観察によって実態を明らかにする必要がある。

本研究は、造形活動における保護者と子どものかかわりの実態を調査し、保護者と子どものかかわりを促進する支援ツールを開発することで、保護者対象の支援を通じた子どもの造形活動支援の可能性と課題を明らかにすることを目的とした。

第 1 章　保護者を対象とした支援の事例

第 1 章では、子どもの造形活動にかかわる保護者を対象とした支援を、造形活動の機会を提供する「場づくりによる支援」と、造形活動に関する情報を提供する「書籍等による支援」の 2 つに分類し、日本国内の事例を対象に調査した。

場づくりによる支援では、京都造形芸術大学の芸術教育センター「こども芸術大学」（2020 年 3 月まで運営）と筑波大学社会貢献プロジェクト「夏休みアート・マルシェ」を研究対象とした。これらの事例では、保護者に子どもの造形活動を間近で見ることができる機会を提供するだけでなく、活動に参加している他の保護者や講師、大学生スタッフとの交流を生むことで、他者の声かけや行動を参考に、保護者が子どもに対するかかわり方を考える機会となりうることが明らかになった。

書籍等による支援では、子どもの描画活動と発達の関連を解説した、安斎千鶴子『お母さんが子どもを理解するために 子どもの絵はなぜ面白いか』（講談社，1986）、子どもの創造的活動に対する具体的な保護者のかかわり方の例を紹介した、ヴィクター・ローウェンフェルド（Victor Lowenfeld）著、勝見勝訳『子どもの絵 両親と先生への手引き』（白揚社，1956）、制作者である子どもの目線に立って作品を鑑賞する方法を提案した、奥村高明『子どもの絵の見方』（東洋館出版社，2010）を事例として取り上げた。これらの事例では、造形活動を子どもの発達を支える上での重要な活動として位置づけ、子ども主体の造形活動を支えることの意義や具体的なかかわり方に関する情報を提供することによって、保護者のかかわりのあり方を示していることが明らかになった。

これらの調査を通じて、保護者を対象とした支援として、親子で造形活動を体験できる場を提供することと、子どもの造形活動に関する知識や情報を提供するものが必要であることが考察された。

第 2 章　造形活動における保護者と子どものかかわりの実態

第 2 章では、3 組の親子（A ～ C 親子）を対象に参与観察を実施し、造形活動における保護者と子どものかかわりの実態を調査した。調査は 2024 年 8 月 4 日に筑波大学社会貢献プロジェクトとして開催された子ども対象のアートイベントである「夏休みアート・マルシェ 2024」の「アート・デイキャンプ（静物）」企画にて実施し（図 1）、参加した親子に研究協力を依頼した。録画・録音によって親子の様子を記録し、発話の書き起こしと行動の分析を行った。保護者から子どもに向けられた発話に焦点を当て、造形活動に対する子どもの態度に影響を与えたと考えられる発話を抽出し、4 つの大カテゴリと 10 の小カテゴリに分類した（図 2）。これをもとに、保護者の発話の種類を分析した。

図 1　参与観察を実施した「アート・デイキャンプ（静物）」の様子

図 2　筆者が作成した保護者の発話カテゴリ

A 親子と C 親子では子どもが意欲的に造形活動に取り組んでいる姿が見られ、この 2 事例では保護者が子どもの活動に対して受容的な態度を示し、子どもの主体的な活動を尊重しようとしているという共通点がみられた。また C 親子の事例では、保護者も造形活動に取り組んでおり、活動中に感じたことや考えたことを親子で伝えあっていたことが特徴的だった。親子で空の色について対話している際に、保護者が夕焼けの空には橙色や紫色があることを言及したところ（「（夕暮れは）オレンジの時もあれば、紫とかの時もあればすごい色の時もあるよね。（⑩探究の促進）」）、子どもがそれまで描いていた青空に橙色や紫色の夕焼けを描き加える姿が確認された。保護者との対話によって、子どもの描いているものへのイメージに広がりが生まれている様子を見ることができた。

B 親子では指導的発話の出現頻度が高く、子どもが対象を観察して描くことに対して若干の苦手意識をもっており、自分の作品に対する自信のなさが窺える発言をしている姿が確認された（例：保護者の④称賛の発話に対し、子どもが「実際はうまくないけど」と発言していた）。ただし、保護者が子どもを褒めたり励ましたりする姿もたびたび見られ、子どもに写実的な表現をさせたいという保護者の思いが指導的なかかわりとして現れたと推測された。

以上の分析から、造形活動に取り組む子どもの姿勢そのものを受容し尊重する保護者のかかわりを促進することが、造形活動に対する子どもの意欲を引き出すために重要であることが示唆された。また C 親子の事例から、保護者との対話が子どものイメージを豊かにし、創造的な活動を促す可能性があることが明らかになった。

第 3 章　造形活動における保護者と子どものかかわりを促進する支援ツールの開発

第 3 章では、筆者が卒業研究において作成した冊子型支援ツールの改良を通して、保護者と子どものかかわりを促進する支援ツールを開発した。ツールは 2 部構成とし、第 1 部ではローウェンフェルドの提唱した描画の発達段階説の解説を中心にし、子どもの造形活動について説明した。第 2 部では、卒業研究の質問紙調査において実際の保護者から収集した造形活動に関する悩みに対して、Q&A 形式でかかわり方の例を提示した。

改良に際して、保護者にツールを配布し、ツールの利点と改善点について質問紙調査を実施した。その結果、描画の発達段階説の解説や悩みに対する Q&A をツールに掲載することが、保護者の造形活動に対する理解を深めるために役立つことが明らかになった。一方、文字量の調節やキーワードの強調による視認性の向上、各発達段階の特徴に関する情報の追加が改善点として挙げられた。

また質問紙調査によって、保護者を対象にした支援を展開する際には、「子どもに具体的な表現方法を指導するための情報や機会の提供」「子どもの造形活動に対する理解を深めるための情報提供」「子どもの造形活動に対する具体的なかかわり方に関する情報提供」の 3 つの観点が求められていることが明らかになった。家庭における造形活動には、環境の構成や活動の進め方を自由に決められるという利点がある一方、その環境は保護者によって構成されるため、保護者の関心や意識が子どもの造形活動に直接的に影響を与えるという問題点もある。家庭における造形活動を支援するためには、保護者が子どもの造形活動の意義を理解し、発達段階に応じた適切なかかわり方を意識できるよう促すことが必要である。

これまでの調査結果を踏まえ、ツールの目的を「造形活動に対する保護者の理解を深め、子どもに対する受容的なかかわりを促進すること」とした。ツールの主な改良点は以下の 4 点である。

① C 親子の事例で見られた親子の対話を例に、造形活動における子どもの意欲を引き出す保護者のかかわり方を提示するページを追加した。対話によって子どものイメージが豊かになり、創造的な活動が促される可能性があることを紹介した。（図 3）

②子どもに具体的な表現方法を指導するための情報を掲載するページを追加した。具体的な表現の工夫や描画材を活用した活動例を取り上げた資料を紹介することによって、関心のある保護者が必要な情報にアクセスできるよう支援する形とした。

③文献調査を通じて、描画の各発達段階における特徴を補足する情報を追加した。（図 4）

④全体の文字量・フォントサイズの調整とデザインの再検討を行った。ページあたりの文字量を調節し、キーワードにあたる部分に色をつけることによって、視認性の向上を図った。

終　章

本研究では、保護者の発話と行動を分析し、造形活動における子どもの意欲と保護者のかかわりの関連について考察を深めた。保護者を対象とした支援は、受容的な保護者のかかわりを促進することによって、表現に対する子どもの意欲を引き出す一助になりうるという可能性を見出した。しかし、家庭の状況は多様であり、情報提供による支援だけでは十分に対応できないという点が保護者を対象とした支援の課題であると言える。この課題を解決するためには、親子が一緒に造形活動に取り組む機会を提供するだけでなく、保護者が困った際に相談できる場を設けるなど、状況に応じた支援を展開することが求められる。そのためには、美術や教育の専門的人材や設備を有する学校等の教育機関や美術館等の文化施設との連携を通じた人的ネットワーク構築が急務であろう。

図 3、図 4　第 3 章で筆者が開発した支援ツール